『経済学批判』序言（1859年）（マルクスの経歴に関する自己紹介:岩波文庫版）
•私は、ブルジョア経済の体制を次の順序で考察する。即ち、資本•土地所有•賃労働、国家、外国貿易、世界市場。初めの3項目では、私は、近代ブルジョア社会が分かれている3大階級の経済的生活諸条件を研究する。あとの3項目の連関は一見して明らかである。
資本を取り扱う第一巻第一部は、次の諸章からなる。 (1)商品、(2)貨幣又は単純流通、(3)資本一般、その始めの2章が本書の内容をなしている。・・・
•ざっと書き終えた一般的序説を、私は、差し控えることにする。なぜなら、・・・これから証明していこうとする結論を先回りして述べるようなことは邪魔になるように思われるし、いやしくも私についてこようとする読者は、個別的なものから一般的なものへとよじ登ってゆく覚悟を決めなければならないからである。これに反して、ここで私自身の経済学研究の経過について二三のことを簡単に述べておくことは、恐らく当を得たことであろうかと思う。(p11)
•私の専攻学科は法律学であった、哲学と歴史とを研究するかたわら、副次的学科としてそれを納めたにすぎなかった。1842年から43年の間に、「ライン新聞」の主筆として、
私は、いわゆる物質的な利害関係に口を出さない訳にはいかなくなって、はじめて困惑を感じた。森林討伐と土地所有の分割についてのライン州議会の討議、当時のライン州知事フォン•シャーペル氏がモーゼル農民の状態について「ライン新聞」に対して起こした公の論争、最後に自由貿易と保護関税とに関する議論、これらのものが私の経済問題に携わる最初の動機となった。
•他方では、当時は、「さらに進もう」という盛んな意志が専門的知識より幾倍も重きをなしていた時期であって、フランスの社会主義や共産主義の淡い哲学色を帯びた反響が「ライン新聞」のなかでも聴かれるようになっていた。私は、この未熟な思想に対して反対を表明した、だが同時にまた「アルゲマイネ•アウクスブルク新聞」とのある論争で、私のこれまでの研究では、フランスのこれらの思潮の内容そのものについて何らかの判断をくだす力のないことを率直に認めた。
•そこで私は、紙面の調子を和らげれば「ライン新聞」に下された死刑宣告を取り消してもらえると信じていた同紙の経営者たちの幻想をむしろ進んで捉えて、公の舞台から書斎に退いたのであった。(p12)
(以下は唯物史観の公式の説明•別紙参照)・以下は「国民文庫」版から引用。
•(p17)私は、F•エンゲルスとは、経済学的諸範疇の批判のための彼の天才的な概説が「独仏年誌」に現れて以来、絶えず手紙で意見交換し続けてきたが、彼は別の経路を経て私と同じ結果に達していた。
•1845年の春、彼もまたブリュッセルに腰を落ち着けたときに、我々は、ドイツ哲学のイデオロギー的見解に対する我々の見解を共同して作り上げること、事実上は我々の以前の哲学的意識を清算することを決意した。この企てはヘーゲル以後の哲学の批判という形で実行された。・・・かなりあとになって事情が変わったので出版できないという知らせを受け取ったが、われわれは、すでに自分のために問題を解明するという主な目的を達していたので、原稿を歯牙にかじる批判に任せた。
•当時、・・・我々の見解を世に問うた仕事のうちからは、私はエンゲルスとの共同執筆になる「共産党宣言」と、私が公表した「自由貿易論」とだけをあげるにとどめる。我々の見解の決定的な諸論点は、1847年刊行のプルードンに反対した私の著書「哲学の貧困」の中で論争形式で

はあったが、はじめて科学的に示された。「賃労働」についてドイツ語で書かれた一論文は、ブリュッセルのドイツ人労働者協会で行った私の講演をまとめたものであるが、2月革命とその結果起こった私のベルギーからの強制退去によって、印刷は中断されてしまった。(p18)
•1848年と49年の「新ライン新聞」の発行と、その後に起きた諸事件とは、私の経済学研究を中断させ、ようやく1850年になってロンドンで私は再び経済学研究にとりかかることができた。大英博物館にある経済学の歴史に関する膨大な資料、ブルジョア社会の観察に対してロンドンが与える好立地、最後にカリフォルニア及びオーストラリアの金の発見とともにブルジョア社会が入り込むようにみえた新たな発展段階、これらのことが、私に全くはじめからやり直して、新しい材料を批判的に研究し尽くそうと決意させた。
•(p19)これらの研究は、一部は外見上全く無縁な諸学科にまで自ずから入り込む事となり、私はこれらの学科に多少とも時間を費やさなければならなかった。
•しかし、とりわけ私の自由時間は、生活費を得るために働かなければならないという必要によって削られた。アメリカ第一流の英語新聞「ニューヨーク•トリビューン」への寄稿はすでに8年になるが、この寄稿は、本来の新聞通信には私は例外として携わるだけなので、研究の甚だしい分散を余儀なくさせた。
•とはいえ、イギリス及び大陸における顕著な経済的諸事件に関する論説が私の寄稿の重要な部分をなしていたので、私は、経済学という本来の科学の領域外にある実際上の詳細事にも精通せざるを得なくなった。
•経済学分野における私の研究の道筋についての以上の略述は、ただ私の見解が、人がこれをどのように論評しようとも、又それが支配階級の利己的な偏見とどれほど一致しないとしても、良心的な、長年にわたる研究成果であることを示そうとするものにすぎない。
しかし、科学の入口には、地獄の入口と同様に、次の要求が掲げられなければならない。
　ここでいっさいの優柔不断を捨てなければならない。
　臆病根性はいっさいここでいれかえなければならない。(※)
(※)(ダンテ『神曲』、地獄編、第三歌、岩波文庫(上)第3曲P25)・・・
「事すべてあきらかなる人の如く、彼我に、一切の疑懼一切の怯心ここに棄つべく滅ぼすべし」